

## これからの共通教育

昭和46(1971)年度 工学部機械工学科卒業 林 英夫

学生時代、専門課程のある教授が、「大学で専門的な学問を学ぶという事は、直接仕事に役立つことを学ぶということではなく、仕事で分からない事に接した時、どういう本を調べたらよいか分かるようになる知識を得ること」というような事を言われた。では共通教育とはどのようなものと考え、どのようにあるべきなのだろうか。

共通教育の特徴は、何といっても広範囲な学問の門戸開放である。高校では学んだ事もない新しい学問が数多くある。またこの時期、学生たちは考える時間をたっぷりと持て余している事も挙げられる。

私は今の会社に就職して40数年になるが、この間様々な事を経験させていただいた。同じ企業で働いていても、多くの種類の仕事と接し、対応することが求められる。その時、専門が何かなど問題ではない。また現在では海外においての生産や販売はごく普通であり、私の職場でも右から英語が聞こえるかと思えば左からは中国語、遠く背後からはタイ語が、という状態である。

大学を卒業した若者が、そのような世界で生きていくのに必要なものは何だろうか。

それは「人間性」と「価値観」、そして「英会話力」であろう。

共通教育では、広い知識に目を向けさせ、若い情熱に限りない時間をかけていろいろなテーマについて議論させ、深く考えさせる。そしてその中から、自分の「生き方」、「考え方」の基礎をしっかり根付かせてやることが重要である。そのためには哲学や倫理学、心理学などを学ばせ、論文形式の試験を行い、自分の考えを深耕させる教育を行ってほしい。

また共通語として、自分の言いたい事を確実に相手に伝えることができるレベルの「英会話力」も必須である。これには絶対的な時間が必要であり、4年間かけて育成するとか、海外の日本語を学びたい学生を留学させ、学生同士が相互に言葉を教えあう場を設定するなど、システムからの工夫が必要であろう。

私は、共通教育はこのような「考え方の根幹となる部分の育成」と「英会話力の習得」に重点を置き、自ら考え、自ら行動できる人間へと成長させる礎を築くために存在すべきであると思う。